

桜門（さくらもん）を通ると、真正面に大きな石が、石垣の中でもひととき大きな目立つ石があって、“蛸石（たこいし）”という名前が付いているのですが、畳 36 畳分の広さなんですよ。1 個の重さが 130 トンです。日本中に色んなお城がありますが、その石垣の石で一番でかいのが大阪城の蛸石なんですね。

蛸石のような石が 10 個以上、大阪城の敷地の中に今でも見ることが出来るのですが、これらの石を運ぶために何回も船が沈没しています。また、この石を陸揚げして引っ張って行くために、おびたらしい人夫の命が亡くなっているんですね。すごい犠牲の上に築き上げられた物なんです。

ところで、大阪城が出来たのはたかだか 400 年くらい前、徳川 2 代将軍 秀忠の時にもまた建て直されるんですが、最大そんなもんでしょ。

エルサレム神殿は今から 2 千年前に造られたんです。そして、今行くと地下トンネルがあって、2 千年前の地面にまで行き着くことが出来るんですが、その巨石などを見ると 1 個の大きさ、特に大きい物は 570 トンですよ。

エルサレム神殿は世界 7 不思議の一つと言われました。どうやってこの石を運んで来たのか。運んできた石をどうやって積み上げていったのか。どのような工法で造り上げることが出来たのか。世界 7 不思議のうちの一つなんですね。

私は何度もその地下トンネルをくぐって、エルサレム神殿の石を色々案内してもらったのですが、最高の工法で造られています。石を載せる前に、下の石の上に鉛の粒をばら撒いて、その上に石をズシーンと置くんですね。鉛という金属は大変柔らかいのでぐちゃっと潰れて、石と石の間隙を埋めて、粘着剤のようにできるだけピッタリくっつくという仕掛けがあったわけですね。もちろん完全ではないのですが、当時の知恵によって、一度積み上がったなら二度と崩されないような仕掛けがあちこち施されている建築物、それがエルサレム神殿でした。

もう一つ エルサレム神殿が破壊されないと思われる理由は、当時のユダヤ世界を支配していたローマ帝国自身が、エルサレム神殿の建物としての価値を非常に高く評価していたのです。

やがて、ユダヤ人たちはローマに反逆してユダヤ戦争を起こしますが、その終盤戦で指揮を執るのが天才的な指揮官ティトゥスという将軍です。

ローマがユダヤ人を制圧する方法は非常に合理的というか、エルサレム以外の全てのユダヤの町を 1 個ずつ撃破していくんですね。北から始めてドンドン南下していくのですが、一つひとつ撃破して、エルサレムだけが最後残るようにしました。

撃破して行く時、ユダヤの残党・逃亡兵たちはみんな エルサレムに集合します。だから追いかけて行く必要がなかった。エルサレムに集合させるだけさせて、その後で、ティトゥスは包囲戦、町全体を大群で取り囲んだんです。

ところでユダヤ人たちには、年に 1 回エルサレムに集まる とっても大事にしているお祭りがありました。それは“過越しの祭り”と言われています。過越しの祭りをお祝いするために、ユダヤだけではなく、世界中に散って色んな外国に居住しているユダヤ人たちもエルサレムに巡礼に来るのです。

エルサレムに来て、ティトウス将軍が既に包囲していますよね。ところが彼は、巡礼に来たユダヤ人たちがエルサレムに入ることを許可したんです。しかし、一旦エルサレムに入ったら、二度と出て来ることは出来ない。ティトウス将軍は外側に出ることを許可しませんでした。するとどうなるか？

あの小さなエルサレムに、世界中のユダヤ人たちが入るだけ入って、出て行くことが出来ない。もう人口超過密状態ですよ。そうした上で、兵糧攻めをやったんです。ただでさえ水・食糧がない中で、いつもより何十倍も人口が多くなって、その上兵糧攻め。大変な惨状になったんですね。

兵糧攻めにした上で、ティトウス将軍は何度も何度も繰り返し投降・降伏を求めました。

「もし降伏したら酷いことはしないから。ローマは寛容だから。さあ投降しなさい！ 白旗上げて敗北を認めなさい！」と何度も訴えるんです。ローマは普通、歯向かった小国に対して、こんな甘っちょろい寛容な態度を取りません。しかし、ティトウス将軍は非常に気長にチャンスを与え続けました。なぜなのか？ エルサレム神殿を無傷のまま残したいと考えていたからです。

それは、ティトウス将軍がイスラエルの神を礼拝したいと思っていたからではありません。エルサレム神殿を建物として無傷状態で残し、エルサレムの町も無傷状態で残し、その上でユダヤ人たちがぜーんぶ追い出して、エルサレム神殿をローマ皇帝を礼拝するための神殿にチェンジする。ローマの神々を礼拝する神殿に転用する。そのために、出来るだけ無傷状態で手に入れたと考えていたんですね。

そこで、ローマ兵たちに厳命していたことがありました。それは“火を使うな。”

エルサレムの町にも神殿にも放火してはならない。エルサレムの町に放火したらどんどん燃え広がって、神殿に燃え移るかもしれない。そうしたら無傷の状態にはならない。だから、火を武器に使ってはならないと厳命していたんです。

ところが、あんなに言うておいたにもかかわらず、エルサレム神殿のすぐ近くで火の手が上がるんですね。いったい誰が火を点けたんでしょう？ ユダヤ人です。

エルサレムに陣取っていたユダヤのリーダーは3人いて、3つのグループに分かれていたのですが、3つとも過激派/熱心党。彼らが自らエルサレムに火を点け出したんですね。

なぜそんなことをしたんでしょう？ “肉を切らせて骨を断つ”という言葉がありますよね。

ローマ兵たちがどんどんエルサレムに乱入して、もう神殿は目と鼻の先。アントニアの要塞にも入って来た。すし詰め状態のローマ兵たちがガーッとやって来る。

その時、ローマ兵たちの頭上にある家屋に放火して、それを崩落させ、落下物で下敷きにして全滅させるという方法を取ったんです。つまり、自らエルサレムに火を点けることによって、エルサレムになだれ込んで来たローマ兵たちを、放火を武器として追い返そう、戦おうとしたんですね。

そのユダヤの戦い方を見てカーッと化したローマ兵は、ユダヤ人自身が火を武器として使っているということで、今度はローマ兵も松明（たいまつ）を建物の中に投げ入れ、火を武器にすることをやってしまうんです。“エルサレムが炎上しています。神殿にも燃え移りました”という情報がティトウス将軍の耳に入ったその時、彼は自ら戦場のその場に行きました。

そして「すぐに火を消せ！ 消火活動せよ！」と言うのですが、その頃にはもう興奮状態。

ティトゥス将軍の声はローマ兵の耳に届かなかった。

あっと言う間に、ローマ兵が放った火が燃え広がって、町にも神殿も燃え盛り、炎上し始めたんです。

ところで、エルサレム神殿は確かに石で造られていましたが、石の表面は杉板で囲まれ、その杉板は金や銀の貴金属で装飾がなされていました。また、神殿には宝物蔵があり、神殿で使う器具の多くは純金（24金）で出来ていたのです。金（きん）に属する物がたくさんあったんですね。

その金が神殿炎上によってドロドロに熔け出したのです。熔けた金は床面の敷石の石と石の隙間に流れ込み、あるいは、壁となっている石と石の隙間に流れ込んだんですね。

さて、戦争に勝利したローマ兵は、これらの金を戦利品とみなしました。そして、石と石の隙間にこびりついた純金を掻き出すために、石を取り除けて行ったんです。1つの大きな石を除けると、その下に純金がブワッと広がっているんですね。それを掻き出して、自分たちの戦利品にしたのです。

ヨセフスの『ユダヤ戦記』を読むと、当時、“突然金の現金化が進んだので金の値段が暴落した”という記録が残っています。それくらいたくさんの金を集めるために、ローマ兵たちは神殿の石を全部崩していったんですね。その瞬間、イエス・キリストのあの言葉が実現したのです。

「ここで、どの石も崩されずに、ほかの石の上に残ることは決してありません。」

イエス・キリストの預言の言葉が文字通り成就したのです。この言葉を筆頭に、聖書の預言はどれもこれも文字通りに実現して来ました。なぜそんなことが起こるのでしょうか？

創造主なる神は時間を超えている方なんですね。

ここにボールペンがありますが、ペンの頭の部分を過去、中央部を現在、ペン先を未来とします。このペンを時間の座標軸と見立てた時、ペンの上に乗っかっている人はずーっと未来に向かって行くんですが、この座標軸を外から見ている私は、過去も現在も未来も全部、同時に見ることが出来る。同じように、創造主は過去も現在も未来も全部“今”なのです。

40年後のこと・400年後のこと・4000年後のことも、神の目には“今”のように映っているのです。そして聖書は、神の目に映っている人類歴史の出来事が記録として残されているものなのです。

なぜ聖書預言が残されているのでしょうか？ 疑り深い現代人も、聖書預言を通して“確かに時間の座標軸を超えている真の絶対者なる創造主がおられる”、それを認めることが出来るための貴重な判断材料となっているのですね。

聖書は単なる古典とか・昔の人の言い伝えとか・諺とか、そんなんじゃない。

まさに人類の造り主である創造主の言葉なんですね。

あなたも聖書預言を通して、創造主が実在されていることを知り、また、創造主であるイエス・キリストに出会っていただくことが本当に私の願いです。そうなりますようにお祈りしております。

次回は、ユダヤ戦争のパートⅢをご紹介します。

それではまた『ごうちゃんねる』でお目にかかりましょう。さよなら!!

*使用した聖書は『聖書 新改訳 2017』です。